

善慶寺山門の前の説明書きに、「浄土宗禅林寺派に属し、明応元年（1492）勸空善慶上人の開基で8世山空和尚を中興開基とする。本堂は18世紀前半の様式と判断され入母屋造・本瓦葺き・向拝一間で江戸時代の浄土宗本堂の形を残す」と姫路市教育委員会が記す。境内墓地にある香邨の墓石は、高い塀越しでも確認できる程、大きくて立派である。

江戸後期に長州藩兵として活躍した東馬は、明治新政府樹立後、帰郷し稻香村舎を開塾し医術を発揮した。明治41年、奥本伝吉氏が網干町長の時、香邨は網干町医と警察医を務めている。住職曰く、香邨は、晩年、人物を鼠に替えた参勤交代行列の絹本画を奥本町長に進呈したが、実に見事な出来栄で、もし、現存していれば相当の価値がある。

善慶寺肥塚浄空鏡準上人、奥本伝吉網干町長、香邨の3人は、特別に、昵懇な関係であったと喜始弘宣住職が、明かして下さった。前者二人は、香邨の愛弟子であったのである。奥本伝吉氏は網干新在家の酒造業を生業とした素封家で、慶応4年（1868）香邨が稻香村舎（後誠塾）を開塾する際、資金援助を惜しまなかった。塾は、香邨没後、久しく空き家であったが、網干地方史談会が買い取り、姫路市に寄贈、現在に至る。

善慶寺所蔵の香邨先生の数ある作品の中で「拈華微笑」は、釈尊が花を拈った意味を理解した迦葉に微笑むという事から言葉を使わず互いを理解するという解釈である。襖絵は、香邨が66歳の作品で、巨大な墨後の双軸が香邨の性格を偲ばせる。「白梅鶴図襖」と「舟遊山水画襖」。住職奥様曰く、菓子鉢は瀬戸の陶工が来郷し、東馬宅の庭に窯を築き、抹茶碗など240点余を焼いた作品の一つで、香邨が喜寿祝いに揮毫し配った。蓮の上の観音像は、香邨が母親の面影を偲んで描いたと伝えられている。

網干歴史講座会員 新在家 三輪京子



「拈華微笑」不立文字



襖絵「白梅鶴図」六十六翁香邨河野通鶴



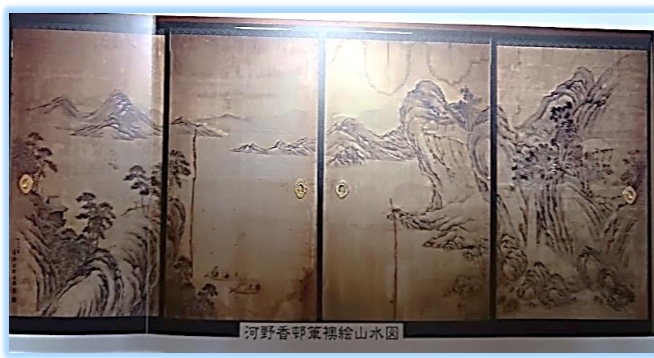
香邨の喜寿祝  
瀬戸焼菓子器



本尊阿弥陀如来座像



梵音海潮音 勝彼世間音



襖絵 河野香邨筆「舟遊山水画」